

市場経済の役割，市場の失敗とコミュニティ政策の視点

中 嶋 則 夫*

はじめに

本研究集会では、まず、市場と都市化・産業化に伴う市場の失敗についてその関係の説明を行った。次に、都市化・産業化に伴う「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」の分離と、各コミュニティにおける人と人との関係性について議論し、都市の「生活のコミュニティ」に内在する問題と社会的孤立との関係を考察した。

他方で、都市の「生活のコミュニティ」における課題である安全・安心確保のための近所付き合いの機能についても言及した。

それに続いて、今後、諸課題の解消に向け、堂目(2009)を参考にアダム・スミスの人間観について整理し、限定的な利他的行動につながる他者への愛着形成とそのための手段について議論する必要があることを示した。また、その手段の一つとしてのスポーツの持つ機能を、玉木(2001)を参考に整理することが必要である点にも言及した。さらに、そのために、まず日本におけるスポーツのあり方の現状について整理し、次に、スポーツとプロスポーツの関係性を概観する必要性や、その在り方の変化による効果、文化としてのスポーツが経済において果たす役割について、政府の市場の失敗へのかかわり方を含め考えていくという方向性も示した。

以下は、その報告の概要である。

1. 市場と都市化・産業化に伴う市場の失敗

分業は財・サービス生産の生産性を向上させ、市場を用いた交換により我々の暮らしを豊かにできる。他方でそれ自体がうまく機能しない市場の失敗も存在する。市場の失敗は、市場で取引される財・サービスの特性から生じたり(需要面、供給面)、市場での取引で生まれる成果の分配面に生じたりする。人々の暮らしの安全・安心に関する主要な財・サービスは、租税・公債を財源とし、公的部門により供給されている。分業と交換を基礎とする市場経済では、生産要素である労働も市場で取引され、それを供給する人々は各自の適性に従い、地域を移動し、その地域に居住しながら、生産活動に従事することになる。そのことが、すでに公的部門が供給している人々の暮らしの安全・安心を脅かしている場合、その状態を都市化・産業化に伴う市場の失敗と考えることができる。

2. 「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」の分離と人と人との関係性

広井(2009)は、コミュニティの定義を「『(…)人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助(支えあい)の意識が働いているような集団』とし、都市化・産業化の進展により、「生活のコミュニティ」にもさま

* 広島経済大学経済学部准教授

ざまな問題が生まれ、特に都市化に伴って生まれた都市の「生活のコミュニティ」における問題に焦点を当てている。

人と人のかかわりあいの希薄さの例として、日本の大都市圏における日常的な場面とその特徴について、広井（2009）は、次のように述べている。

「(1) 見知らぬ者どうしが、ちょっとしたことで声をかけあったり、挨拶をしたり会話を交わしたりすることがほとんど見られないこと／(2) 見知らぬ者どうしが道をゆずり合うといったことがまれであり、また、駅などでぶつかったりしても互いに何も言わないことが普通であること／(3) 『ありがとう』という言葉が他人どうしで使うことが少なく、せいぜい『すみません』といった、謝罪とも感謝ともつかないような言葉がごく限られた範囲で使われること／(4) 以上のような中で、都市におけるコミュニケーションとしてわずかにあるのが『お金』を介した（店員と客との）やりとりであるが、そこでは、店員側からの声かけが一方通行的に行われ、客側からの働きかけや応答はごく限られたものであること／(…) (1)～(4) に共通しているのは、『見知らぬ者』どうしの関係の希薄さ、あるいはコミュニケーションの不在ということである。(…) 『知っている者どうし』、つまり“身内”における気遣いの、過度までの濃密さと表裏の関係にあるからである。言い換えれば、“身内”に対する関係と“他人”に対する関係のあり方の違いの『落差』の大きさが、日本社会において際立っているのだ。／(…) 『“身内”あるいは同じ集団に属する者の間では、過剰なほどの気遣いや同調性が強く支配する反面、集団の『外』にいる人間に対しては、無視

か潜在的な敵対関係が一般となる』ということが指摘できる。」（広井 2009）

さらに、広井（2009）は「稲作等を中心とする農村の地域コミュニティが、そのまま『生産のコミュニティ』でありかつ『生活のコミュニティ』でもあった。」状態から、「急速な都市化・産業化の時代において、両者は急速に“分離”していくとともに、『生産のコミュニティ』としてのカイシャが圧倒的な優位を占めるようになっていった。」という。

また、広井（2009）は、都市化・産業化の時代における「生産のコミュニティ」はカイシャであり、その中に農村を形成し、そこを身内としていると言う。その特徴を「“身内”あるいは同じ集団に属する者の間では、過剰なほどの気遣いや同調性が強く支配する反面、集団の『外』にいる人間に対しては、無視か潜在的な敵対関係が一般となる」としている。

このような、「生産のコミュニティ」の中では、過剰なほどの気遣いや同調性が強く支配し、他方で、都市の「生活のコミュニティ」においては、各自の適性に依拠して都市に移動した人々が、見知らぬ人々である近隣居住者と一定の範囲内で生活しているため、その関係性は、希薄となり、彼らは相互に、集団の『外』にいる人間として無視するか、潜在的な敵対関係となっている。このように「集団の『外』にいる人間に対しては、無視か潜在的な敵対関係が一般となる」ことから、都市の「生活のコミュニティ」で必要とされる公共財の供給に際し、公的部門の役割が重要になる。

現在、効率性を追求する傾向が強まる「生産のコミュニティ」では、それを構成する人々を身内としていた関係性が崩れ始め、身内と感じられなくなりつつあるという。これは、OECD（2005）が行った、友人や同僚、他の交流グループ構成員との交流の程度を尋ね社会的孤立を計

測する調査で、日本が社会的孤立度の高い国であるという結果と呼応しているように思われる。

3. 都市の「生活のコミュニティ」に内在する問題と社会的孤立

3.1 社会的孤立のもたらすもの

OECD (2005) によれば、社会的孤立が引き起こす問題は以下のようなものである。

「社会的孤立は社会が困難に直面していることを示す兆候でもあり、社会を困難な状態にする原因でもある。社会的孤立の経験は家族の崩壊、失業、疾病、経済的困難につながる可能性がある。一旦、社会的に孤立すると、個人は、社会的な役割を果たす個人として再度社会とかかわりを持ちにくいというだけでなく、仕事、家族、友人に対して積極的にかかわりを持つことが難しくなる可能性がある。社会的孤立は下降スパイラルにつながり、その疎外感志気に負の影響を与え、他の人々との付き合いの減少は、社会的交流および経済的機会を減少させる可能性がある。」(筆者訳) (OECD 2005)

このように、社会的孤立は、その疎外感から志気に負の影響を与え、他の人々との付き合いが減少し、そのことが社会に難しい問題を生み出すことにつながる可能性を指摘している。社会的孤立が志気にどのように負の影響を与えるかについて次に考えていく。

3.2 喜びへの同感と悲しみへの同感の非対称性が与える社会的孤立に直面する個人の社会的交流機会・経済的機会への影響

都市の「生活のコミュニティ」において、そこで生活する人々は、集団の「外」にいる人間として、相互に無視か敵対関係の状態にある。

また、「生産のコミュニティ」内の人々を身内としていた人と人との関係性が崩れ始めれば、二つのコミュニティ内で、人と人との相互の関係は無視か潜在的な敵対関係の状態が生じ、社会的孤立を加速させるであろう。この現象は、喜びへの同感を悲しみへの同感よりも好むことと、周囲からの同感が得られにくい状態にある人がどのような状態に陥るかという視点から理解できる。

堂目 (2009) は、我々が、喜びへの同感を好む傾向があるということを中心に説明している。

「人間は悲哀よりも歓喜に同感したいと思う傾向をもつ。喜びは同感して楽しい感情であり、悲しみは同感すると苦しくなる感情だからである。[...] 嫉妬のせいで他人の歓喜に同感できないことがある。しかしながら、胸中の公平な観察者は、嫉妬を見苦しい感情として否認するので、私たちは嫉妬を抑えようとする。嫉妬を乗り越えることができるならば、[...] 私たちは進んで他人の歓喜に同感する。そして、同感の程度は他人が現に感じている歓喜の程度にかなり近いものになる。一方、他人の悲しみを見るとき、私たちは他人の悲しみを自分も感じなければならぬと思う。しかしながら、私たちは他人の悲しみに同感することをためらい、同感したとしても、通常、その程度は他人が現に感じている悲哀の程度に及ばない。/[...] 歓喜への同感私たちに快樂をもたらすが、悲哀への同感私たちに苦痛をもたらす。このため私たちは、他人と一緒に悲しむことよりも、他人と一緒に喜ぶことを好むのである。」(堂目 2009)

このように、我々は、さまざまな出来事に同

感するが、歓喜への同感をより好み、悲しみに同感することをためらう傾向にある。

人と人との関係性が希薄な、都市の「生活のコミュニティ」のように、周囲からの同感が得られにくい状態に陥れば、無視か潜在的な敵対関係が深まり、OECD（2005）が指摘するように、社会的役割を果たす個人として再度社会とかかわりを持ち難くなる。集団の「外」の人間として無視か潜在的な敵対関係が一般的な状態となり、相互に同感しにくい環境に置かれれば個人にどのような影響を与えるかについて、堂目（2009）は以下のように述べている。

「自分は世間から無視され、あるいは軽蔑されていると思うことは、人間の希望をくじき、心の平静を乱す。無感覚にならないかぎり、あるいは社会との関係を完全に断ち切らないかぎり、私たちは、自尊心を傷つけながら生きていかなければならない。人間にとって、これほど辛く惨めな状態はないであろう。心の平静を得るためには、最低水準の収入を得て、健康で、負債がなく、良心にやましいところがない生活を送らなければならない。」（堂目 2009）

個人は、自尊心を傷つけながら生き、これほど辛く惨めな状態はなく、心の平静とは程遠いものとなり、それに対応して社会との関係性にも変化を生じさせる。そのような変化により生じる疎外感が志気に負の影響を与えるであろう。このように、都市の「生活のコミュニティ」に内在する相互の無視か潜在的な敵対的關係をきっかけに、社会的孤立が進み、個人の社会的交流や経済的機会の減少に波及し、その結果、社会的孤立がさらに進むという下降スパイラルを通じて、社会を困難な状態にすることとなる。

4. 都市の「生活のコミュニティ」における安全・安心確保のための近所付き合い

社会的孤立に起因する問題を解決に向かわせる人々の関係性が持つ可能性も他方で存在している。橘木（2011）は、朝日新聞の調査結果として挙げられている、近所づきあいの理由について、「生活上の義理」、「昔からの習慣」、「緊急時に助け合える」、「共同体の仲間だから」、「防犯」、「気の合う隣人がいる」、「管理組合や町内会で」などを示し、その中に「安全・安心の確保が近所づきあいのメリットに感じていることは貴重な情報である。」（橘木 2011）としている。このことは、近隣居住地域の住民間の関係性が、居住地域に限定的な公共財である安全・安心の供給量に影響を及ぼすことがあることを認識している結果であると思われる。

結 語

今回の研究集会では、主に、市場経済における「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」の分離と社会的孤立、都市の「生活のコミュニティ」に必要な安全・安心、近所付き合いと都市の「生活のコミュニティ」における安全・安心の確保に関する報告を行った。

そこでは、相互に集団の「外」にいる人間として無視か、潜在的な敵対関係となっている点、そのような人と人との関係性から疎外感が生まれ、それが志気に負の影響を与える点、さらに、相互に同感する機会が少ない状態に陥り、そのことが社会的孤立度を高めることにつながる可能性がある点について触れた。

他方で近所付き合いが安全・安心を得る手段として有効に機能する可能性の存在も指摘し、今後、その具体的な確保に関する議論が必要であるという課題が明らかとなった。従って、今後それらを以下の視点で明らかにしていくこと

になる。

- ・社会的孤立を解消し、都市の「生活のコミュニティ」に必要な公共財としての安全・安心を供給するための視点と諸手段に関する議論
- 社会的孤立および都市の「生活のコミュニティ」における見知らぬ同士の関係性から安全・安心という公共財を供給するための方策として、その関係性を保持したままでそれを目指す考え方で、その関係性に何らかの変化を促し、それを目指す考え方が存在する。前者は、利己的で合理的な個人を想定した経済学からのアプローチであり、後者は、利己的な部分と限定的ではあるが利他的な部分を併せ持つ個人を想定した経済学からのアプローチである。

都市の「生活のコミュニティ」内の公共財としての安全・安心を見知らぬ同士で供給する場合、それらが必要であることを認識していてもそれが十分に供給されない事態が生じる恐れがある。

都市の「生活のコミュニティ」内の安全・安心とは、火事の初期消火や災害に遭遇した際の初期対応のための相互協力システム、子供や高齢者などの見守り、防犯・防災活動などの、人命や私有財産を守るための財・サービスであり、市場経済の基盤となる。従って、そのような財・サービスが供給されない事態は避けることが望ましい。

このような公共財を供給するためには、その必要性に関する近隣居住者間の情報共有とともに、その供給に必要な経費負担の必要性および経費負担の配分方法を決めなければならない。そのような情報交換を行うには、人と人の関わり合いが欠かせないであろう。その関係を相互に築いていくために政策が必要になる。政策には、その目的を達成する手段が存在するが、その一つの視点としてどの程

度公的部門がかかわるのかというものがある。特に、経費に関する基準は重要である。

- ・課題解決のための諸手段の一つとしての余暇活動の役割の議論—特に日本におけるスポーツ理解の現状とその正確な理解のもとスポーツの持つコミュニティ政策手段としての可能性

問題となる現象をより良い状態にするためにはその原因を取り除く必要がある。その原因を除去するためにまず、市場における人間観について堂目（2009）を参考に考察し、限定的利他的行動につながる他者への愛着形成について議論する必要がある。それに続いて、愛着形成のための手段として、余暇時間に行うスポーツの持つ機能について述べ、余暇活動としてのスポーツとプロスポーツとの関係を議論する。その後、日本におけるスポーツのあり方の現状を、玉木（2001）を参考に整理し、その在り方が変化することでもたらされる効果について議論を進め、それらを手掛かりに、文化としてのスポーツが経済においてどのような役割を果たすのか、果たすことができるのかについて、政府のかかわり方を含め検討することが課題となる。

参 考 文 献

- Adam Smith (1790), *The Theory of Moral Sentiments* (Sixth edition); introduction by Amartya Sen; edited with notes by Ryan Patrick Hanley (2009), Penguin Classics
- OECD (2005) "CO2. Social Isolation" *Society at a glance: OECD SOCIAL INDICATORS 2005 EDITION*, OECD pp. 82-83
- Jenny Onyx, Paul Bullen (2000) "Measuring Social Capital in Five Communities" *The Journal of Applied Behavioral Science*
- 古賀弥生 (2011) 『芸術文化がまちをつくるⅡ 地域活性化と芸術文化』九州大学出版会
- 神野直彦 (2002) 『財政学』有斐閣
- 諏訪伸夫・井上洋一・齋藤健司・出雲輝彦編 (2008) 『スポーツ政策の現代的課題』日本評論社
- 橋本俊詔 (2011) 『無縁社会の正体 血縁・地縁・社

縁はいかに崩壊したか』PHP 研究所
玉木正之（2001）『NHK 人間講座 日本人とスポーツ』日本放送出版協会
堂目卓夫（2009）『アダム・スミス “道徳感情論” と“国富論”の世界』中公新書
原田宗彦（2002）『スポーツイベントの経済学—メガ

イベントとホームチームが都市を変える』平凡社新書
広井良典（2009）『コミュニティを問いなおすい つながらり・都市・日本社会の未来』ちくま新書
山崎 亮（2011）『コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる』学芸出版社